

鍼灸歌賦の押韻について

浦山 きか

Ⅰ はじめに——本稿でとりあげる問題

中国伝統医学は、身体観や診断理論、治療原則など、独特の知識を必要とする分野である。鍼灸であれば、経脈の走行と連続の順序、脈診と呼ばれる診断法や孔穴（俗にいうツボ）名や部位などであるが、それらの知識を実際の治療の場で役立てようとするれば、記憶し誦んじていたほうがよい。歌賦の形にまとめられていれば、暗誦に都合がよくなるはずだから、医書に収録される韻文は現実的で有意義なものであったに違いない。

『中国鍼灸叢書・鍼灸歌賦』¹前言は、鍼灸²歌賦をこう評価する。

鍼灸歌賦、因其短小精煉、言簡意賅、易于記誦、便于普及而深受習医者の歓迎。加之歌賦善于将所学内容高度概括、化繁為簡、形式活潑、以致広為流伝。它对鍼灸医学的普及及推广起到了很大的作用、同様具有一定的文献価値。因此也是繼承和發展鍼灸医学不可缺少的重要内容之一。

鍼灸歌賦というものは、サイズは短く内容が練られていて、ことばは簡潔でも意味するところは備わり、暗誦しやすく普及に便であったため、大いに医を学ぶ者の歓迎を受けた。歌賦の形は学習内容を簡潔な形でまとめ、煩雑な内容も簡明に、形式も生き生きとして、広く流行するに至った。その鍼灸医学に対する普及拡大の作用は大きく、一定の文献的価値を有する。よって鍼灸医学を繼承し発展させるために不可欠で重要なアイテムの一つなのである。

そもそも鍼灸歌賦に読み込まれる内容は、孔穴名などのいわばテクニカルタームである。それらは押韻のいかんによって文字を変更するわけにはいかないという拘束を負う。その拘束の中で、鍼灸歌賦はどのように発展してきたかを概観し、鍼灸歌賦について押韻がど

のような役割を果たしてきたのかを幾つかの例を挙げて検討するのが、本稿の企図するところである。

「鍼灸歌賦」と総称するが、押韻してあるものについては、一句何言と揃えてあるものを「歌」、揃えていないものを「賦」と呼び習わしてきた。押韻していないものは「訣」と称されることもあった。以後、「歌訣」という場合にはより一般的な総称とし、「歌賦」という場合には「歌」「賦」を合わせたものを特に指すこととする。

Ⅱ 「鍼灸歌賦」に至るまでの医書における有韻の文

前掲『中国鍼灸薈萃・鍼灸歌賦』に収録される歌賦は、元代から明代にかけての医書に記されているものがほとんどである。しかし、それ以前の医書に、有韻の文が見られなかったわけではなかった。

中国伝統医学の内容を伝える基本書としては、『漢書』藝文志に見える『黄帝内経』が挙げられる。本書は『素問』『靈枢』の二書から成る。

銭超塵『内経語言研究』³⁾は、「訓詁」「音韻」「語法」の三編に分けて『黄帝内経』の小学的な面について記しているが、その中編「音韻」の第三章《内経》音韻研究的歴史回顧(p228)において『黄帝内経』は全体的にみれば散文による著作であり、韻文でできているとはいえないが、その語学的な面について具体的に詳細に分析してみれば、散文を主体としながらも、多くの、極論すれば大量の有韻の文を含む著作と言えるであろう⁴⁾という。

そこで、『黄帝内経素問』の中から、有韻と見られる文章の例を挙げておこう。疏五過論篇第七十七の篇末10句は以下のような文により締めくくられる。

診病不審、是謂失常。謹守此治、与經相明。上經下經、揆度陰陽、奇恒五中、決以明堂、審於終始、可以橫行。

診病審らかならざれば、是を失常と謂ふ。謹みて此の治を守れば、經とともに相明らかならん。『上経』『下経』、『揆度』『陰陽』、『奇恒』『五中』、決するに明堂を以てし、終始を審らかにすれば、以て横行すべし。

これら列举された『黄帝内経』よりさらに古い医書を参照し、明堂（その色を診断材料とする顔面の部位）を見て病の初めと終わりを明らかにすることが大事だというくだりで

ある。書き下し文中『』で記したのは、古医書の書名と見られる⁵。

上記の偶数句の末尾字である「常」「明」「陽」「堂」「行」を、郭錫良は全て「陽」韻と推定し⁶、前述の錢超塵も全て押韻すると考証する⁷。「常」「陽」は『広韻』では下平声 10「陽」の韻に属す。「堂」は 11「唐」の韻に属し小韻は「唐」で、「陽」「唐」とともに摂は同じで同用される。「明」「行」はいずれも 12「庚」韻に属す小韻字である。この疏五過論篇末は一例であるが、『黄帝内経』中には、有韻の文が多く存在することは確かであり、口誦に便な部分を多く含んでいたことは推測できる。ただし、文中の一部分が韻文の形式をとるのであって、単独で流行したものではなかった。

医学に関連する韻文のうち、一定のまとまりと名称をもって記された早期のものに、晋の王叔和（3 世紀）の撰になる『脈経』中の「脈法讃」⁸がある。診脈についてのポイントを記した歌訣であり、4 字句で全 28 句。鍼灸のみならず、医学一般に通じる内容を持つ。「脈法讃」について、『脈経校釈』⁹は「当為古医書、待考」と記しているが、『脈経』以前の医書に保存されているものはない。以下に挙げる。

脈法讃云、肝心出左、脾肺出右。腎与命門、俱出尺部、魂魄穀神、皆見寸口。左主司官、右主司府、左大順男、右大順女。関前一分、人命之主、左為人迎、右為氣口、神門決断、両在関後。人無二脈、病死不愈、諸経損減、各随其部。察按陰陽、誰与先後、陰病治官、陽病治府。奇邪所舍、如何捕取、審而知者、鍼入病愈。〔卷一・両手六脈所主五藏六腑陰陽逆順第七〕

偶数句の漢字について、郭錫良による上古音と『広韻』に基づく推定音価を記せば以下のようになる。

偶数句漢字 （「脈法讃」 中の位置）	上古音	『広韻』の反切、声・ 韻・開合・等・声調・ 摂、推定音価	偶数句漢字 （「脈法讃」中 の位置）	上古音	『広韻』の反切、声・ 韻・開合・等・声調・ 摂、推定音価
右（2 句目）	匣之 ɣiwo	于救切 云宥開三去流 j̥iəu	主（12 句目）	章侯 t̥iwo	之庾切 章麌合三上遇 t̥ɕiʉ
部（4・20 句 目）	並之 bə	蒲口切 並厚開一上流 bəu	後（16・22 句 目）	匣侯 ɣo	胡口切 匣厚開一上流 ɣəu
口（6・14 句 目）	溪侯 k'ɔ	苦后切 溪厚開一上流 k'əu	愈（18・28 句 目）	余侯 ɰiwo	以主切 余麌合三上遇 j̥iʉ

府（8・24 句目）	幫侯 pɿwo	方矩切 幫麌合三上遇 pɿu	取（26 句目）	清侯 ts 'ɿwo	七庚切 清余麌合三上遇 ts 'ɿu
女（10 句目）	泥魚 nɿa	尼呂切 泥語開三上遇 nɿo			

郭錫良の推定に基づいて上古音を考えるならば、十句目の「女」以外は、二句目・四句目で同韻を用い、六句目・八句目以下他の偶数句を一韻で通していることになる。十句目にしても、前出の錢超塵によれば『黄帝内經』では魚と侯の韻は合用¹⁰であるといい、『脈經』中の「脈法讚」も同様と考えられるならば、四句目の換韻を境目に、全体を二つの韻によってまとめていることになる。

次いで『広韻』に拠って考えると、「尤」韻の去声である「宥」、「尤」同用の「侯」の上声である「厚」韻を二・四・六句に揃え、八句目以降は同用の「魚」「虞」韻を基本として、十六・二十二句目に前半に用いていた「厚」韻が配されている。声調は異なるが同じ音である。「脈法讚」においても「魚侯同用」が適用できれば、八句目以後、全ての偶数句の韻が統一されていることになる。声調は二句目の「右」のみ去声、他は上声である。

内容を見てみると、「左右」「男女」「陰陽」などの場合分けによって奇数句と偶数句が対をなす場合は、歌わなければならない要素が自ずと決まっている。二句目、八句目、十句目、十四句目、二十四句目は、それぞれ前の一句との内容としては対をなすので、句末の字配りにそれほど自由は無いはずである。他の句については、文字の配し方がより自由であったと見られるが、その時、句末字の変更がより不自由な文字の韻にあわせて文字を決めた可能性は大いにある。さらに、末尾四句は必ずしも重要な内容とは言えないが、全体に対してまとめの役割を負い、これがあることで一つの作品として仕上がっている。

「脈法讚」は初唐の孫思邈（581-682）の医学全書的著作である『備急千金要方』卷二十八・五臟脈所屬第四にも収録されていることから、次代にあっては広汎に流布した歌訣と言えよう¹¹。上古音で考えても『広韻』をもとに推定しても、音韻の面から見てよく整えられていることは、「脈法讚」が広く行われた理由の一つに数えられるかも知れない。

Ⅲ 歌訣で構成された書——『傷寒百証歌』

宋代の歌賦としては、許叔微（1079-1154。真州毗陵の人）の撰になるとされる『傷寒百証歌』¹²が挙げられる。傷寒の病の諸症状について、第一証から第百証まで順に、全て七

言句として形作っている。前後に「論」を備えるが、ほぼ全篇にわたって歌訣形式を中心に構成されており、この構成を取る早期の医書と言える。「証」とは「證」とも書き、多くの意義で用いられてきたが¹³、当該書でいう「証」とは、病気のサインのことである。

第三十六証、三十七証に「可灸不可灸」「可鍼不可鍼」があり、これらを前出『中国鍼灸荟萃』は、鍼灸歌訣と看做しているが¹⁴、当該書においては、「傷寒」の病に関する治療方法について、第三十一証より「可汗不可汗」「可下不可下」「可吐不可吐」「可火不可火」「可水不可水」と、所謂「汗・吐・下」に「火・水」を加え、それぞれの治療法の適用について記している中に「灸・鍼」の可否を連ねた流れが看取される。「可鍼不可鍼」は、比較的長く、七言で全二十句の構成である。以下に挙げる。

太陽頭痛經七日、不愈再伝成大疾。法中当刺足陽明、可使不伝邪氣出。桂枝服了煩不解、風府風池刺無失。經来經断刺期門、正恐熱邪居血室。項強当刺大椎間、脈有縦横肝募吉。婦人懷身及七月、從腰以下如水溢。当刺勞宮及関元、以利小便去心実。大怒大勞并大醉、大飽大饑刺之逆。熇熇之熱漉漉汗、渾渾之脈安可失。浅深分寸自依經、此道相伝休秘密。

再び郭錫良の推定音価を見てみよう。

偶数句漢字 (歌訣中の位置)	上古音	『広韻』の反切、声・韻・開合・等・声調・撰、推定音価	偶数句漢字 (「歌訣中の位置)	上古音	『広韻』の反切、声・韻・開合・等・声調・撰、推定音価
疾(2句目)	從質 dzɿət	秦悉切 從質開三入臻 dzɿət	溢(12句目)	余錫ɿɛk	夷質切 余質開三入臻 jɿət
出(4句目)	昌物 tʰɿwət	赤律切 昌術合三入臻 tɕɿuət	実(14句目)	船質dɿət	神質切 船質開三入臻 dzɿət
失(6・18句目)	書質 ɕɿət	式質切 書質開三入臻 ɕɿət	逆(16句目)	疑鐸ɳjak	宜戟切 疑陌開三入梗 ɳɿɛk
室(8句目)	書質 ɕɿət ¹⁵	式質切 書質開三入臻 ɕɿət	密(20句目)	明質miət	美筆切 明質開三入臻 miət
吉(10句目)	見質 kɿət	居質切 見質開三入臻 kɿət			

上記のように、全て入声で押韻する。上古音では十二句目・十六句目それぞれ「溢」「逆」が「-k」で終わる音であるが、他は「-t」で終わる入声である。『広韻』によって韻字を見れば、「逆」以外は「質」韻で整えられている。「術」は「質」と同用であるので、「出」字も押韻している。「逆」は『広韻』では入声二十陌の韻である。会合と等とは「質」韻と同じであるが、十六句目で一つの韻を踏み落とす。十五～十八句目は、『靈樞』終始第九の「刺之禁…大驚大恐、定其氣、乃刺之」、逆順第五十五の「刺法曰、無刺熇熇之熱、無刺漉漉之汗、無刺渾渾之脈、無刺病与脈相逆者」を踏まえて鍼の禁忌を記したくだりで、内容から使用できる文字に制約があったことが推測できる。さらに十八句目においては、再び六句目で用いた「失」字を用いて押韻を「質」韻に戻し、締めくくったということになるうか。

「可灸不可灸」は短く、全十二句での構成である。

少陰吐利時加嘔、手足不冷是其候、口中雖和背惡寒、脈来微瀦皆須灸。陰毒陽虛汗不止、腹脹腸鳴若雷吼。

面黑更兼指甲青、速灸関元応不謬。微数之脈却慎之、因火為邪恐難救。脈浮熱甚灸為難、唾血咽乾不可謬。

偶数句漢字 (歌訣中の位置)	上古音	『広韻』の反切、声・韻・開合・等・声調・摂、推定音価	偶数句漢字 (「脈法讀」中の位置)	上古音	『広韻』の反切、声・韻・開合・等・声調・摂、推定音価
候(2句目)	匣侯 v0	胡溝切 匣候開一去流 vəu	謬(8句目)	明覺 miəuk	靡幼切 明幼開四去流 miəu
灸(4句目)	見之 kiwə	挙有切 見有開三上流 kiəu	救(10句目)	見幽 kiəu	居祐切 見宥開三上流 kiəu
吼(6句目)	曉侯 x0	呼后切 曉厚開一上流 xəu	灸(12句目)	見之 kiwə	挙有切 見有開三上流 kiəu

参考のため上古音も同一表中に記したが、『広韻』によれば各偶数句の摂は「流」で同一、声調は「上声」「去声」をともに用いているということになる。これも実際上は押韻と看做されたと考えられる。句末字の韻が整えられる限りは整えたと見られるが、それは記憶に便になることが優先される歌訣においては(敢えていうならば、文学性を問うことが優先されるわけではない歌訣においては) 実際的な句末字の処理のしかただったのではないかと考える。

『傷寒百証歌』を見れば、宋代には「歌」と称した治療用歌賦が書籍としてまとめられ

たことに間違いはない。題材として読み込む内容にテクニカルタームが多いと四字句では間に合わず、形式としては七言詩が選択されたと思われる。本書の書名に「歌」というのは、一句の文字数が整えられたことによる名称であろう。概ね「歌」であれば一句の字数を（多く七言に）整えられ、或いは三字句や四字句が差し挟まれて「賦」と呼ばれて、鍼灸に関する「歌賦」も作成されることになるのは続く時代のことであり、『傷寒百証歌』はその嚆矢と言えると思われる。

Ⅳ 歌賦の生成と定着——『医経小学』

『傷寒百証歌』のように、一書の大半を歌訣で占める書籍が出たのは、前述のように宋代のことである。

明初、洪武 21 (1388) 年、劉純 (14 世紀。一説に 1358 生～1418 卒とも)¹⁶によって著された『医経小学』も、その大部分を歌訣が占める。全六巻、長短はあるが 200 首に近い歌訣が収められ、歌訣になっていない部分は、巻之二に僅かに見られるばかりである。各篇題には「歌」と称されていないが、「論」字がついていないものは、原則的に定型句押韻の形をとる。

書名にある「医経」とは、史志書目においては『漢書』藝文志・方技略の下位分類の一つで『黄帝内経』を含む¹⁷。方技略・医経序に「医経者、原人血脈・経落（絡）・骨髓・陰陽・表裏、以起百病之本、死生之分、而用度箴石湯火所施、調百藥齊和之所宜…」とあり、医経とは身体に関する基本的な原理を示したものと認識される。『医経小学』全体の構成であるが、巻之一は「本草第一」、巻之二は「脈訣第二」、以下一巻ごとに「経絡第三」「五運主病第四」「治法第五」「運氣第六」が続く。「本草」は、「漢志」方技略では経方の分類に含まれるため、内容としては医経からややみ出している。「本草」を入れたことで医学全書に近い全体像をもつが、外科などの要素はないため、医学における原則的な内容を概括的に示したにとどまる。つまり内容もまた初学者のためのものであり、著述形式もまた歌賦の形をとったことで、初学者に向けてより理解しやすくなっているといえるであろう。劉純には全五十巻から成る大著『玉機微義』があるが、こちらは比較的小品である。

巻之一の巻首には、「医学指南総訣」として以下の二種を掲げる。

不読本草、焉知藥性。專泥藥性、決不識病。仮饒識病、未必得法、識病得法、工中之甲。

能窮素問、病受何氣、便知用藥、当択何味。

不誦十二經絡、開口動手便錯。不通五運六氣、檢遍方書何濟。經絡明、認得標、運氣明、認得本。求得標、只取本、治千人、無一損。

本草を読まざれば、焉んぞ薬性を知らん。専ら薬性に泥まば、決して病を識らざらん。仮饒ひ病を識れるも、未だ必ずしも法を得ず、病を識りて法を得れば、工中の甲ならん。能く『素問』を窮めよ、病の何の気をか受くると。便ち知れ用薬を知れ、当に何の味をか択ぶべきを。

十二經絡を誦せざれば、口を開き手を動かすも便ち錯たん。五運六氣に通ぜざれば、方書を檢遍するも何をか済はん。經絡明らかなれば、認めて標を得、運氣明らかなれば、認めて本を得ん。求めて標を得、只だに本を取れば、千人を治すとも、一損も無からん。

「医学指南総訣」は、一首目は一句四言を基本とし、二首目は六言を基本として作られている。これら二首は、『医經小学』全体の中では、一句の字数が統一的ではないほうに属するが、それでも押韻が試みられている。句末字の韻を見るために、再び郭錫良が『広韻』¹⁸から推定した音価を挙げておく。

句末の漢字 (歌訣中の位置)	『広韻』の反切、声・韻・開合・ 等・声調・撰、推定音価	句末の漢字 (歌訣中の位置)	『広韻』の反切、声・韻・開合・ 等・声調・撰、推定音価
性(2、3句目)	息正切 心勁開三去梗 siɛŋ	甲(8句目)	古狎切 見狎開二入咸 kap
病(4、5句目)	皮命切 並映開三去梗 biɛŋ	氣(9句目)	去既切 溪未開三去止 k'ɿɿi
法(6、7句目)	方乏切 幫乏合三入咸 piwɛp	味(10句目)	無沸切 明未合三去止 miwɿi

この一首は、同字が繰り返して使われていることもあるが、一句目を除いて二字ごと(6～8句目については三字)に押韻されていると見てよく、覚えやすかったことが推測できる。

二首目は中盤に同字の繰り返しが多い。「標」「本」は、相反する概念で病気の前後関係や病因と症状など多くの意味で用いられる概念で¹⁹、五句～十句はそれに当てられている。以下に郭錫良による『広韻』の音価を記すとともに、『中原音韻』²⁰に拠って押韻のいかんを考慮してみたが、十句目の「本」以降は同一撰による字で韻を踏む。三～四句については『中原音韻』の韻類に拠って見れば押韻していることがわかる。

句末字（歌 訣中の位 置）	『中原音韻』	『広韻』の反切、声・韻・ 開合・等・声調・摂・推 定音価	句末字（歌 訣中の位 置）	『中原音 韻』	『広韻』の反切、声・韻・ 開合・等・声調・摂・推 定音価
絡(1句目)	十一蕭毫・入 声作去声	廬各切 来鐸開一入宕 lak	標(6、9句 目)	十一蕭毫・ 平声・陰	甫遥切 幫宵開三平效 piɛu
錯(2句目)	十一蕭毫・入 声作上声	倉各切 清鐸開一入宕 ts 'ak	本(8、10 句目)	七真文・上 声	布付切 幫混合一上臻 puən
氣(3句目)	四齊微・去	去既切 溪未開三去止 k 'ɛi	人(11句目)	七真文・平 声陰	如隣切 日真開三平臻 ɕiɛn
濟(4句目)	四齊微・去	子計切 精霽開四去蟹 dziei	損(12句目)	七真文・上 声	蘇本切 心混合一上臻 suən
明(5、7 句目)	十五庚青・平 声・陽	武兵切 明庚開三平梗 mɪɛŋ			

『医経小学』が明代になって成立したとしても、劉純は元代の末期に生を受けたと見るのが妥当である。劉純が『医経小学』を製作したのは、いきおい元末明初となろう。この時期に、医学を内容とする歌賦の多くが整えられ、就中鍼灸を内容とする歌賦が作られ固定化していったと考えられる²¹。劉純が『医経小学』所収の各歌の題下に、基となった書籍・資料を注していることは、歌訣の製作過程を明示するとともに、当該時代に歌訣が整えられていったことをも示唆するのである。

幾つか例を挙げれば、巻之一の「医学指南総訣」の題下には「二首。并出『玉匱金鑑』とあり、ついで「本草第一」冒頭の「薬本五味」の下には「一首。集次見『内経』至真(要²²)大論諸篇」といい、巻之四「傷寒証候」の題下には「一首。集次見『傷寒百証歌』」というなどである。これらはそれまで有韻の形でまとめられていなかった内容を用いて、劉純が歌訣を製作したことを意味する。

鍼灸に関わる内容を考慮し、特に巻之三「経絡第三」所収の歌訣の題下に記された注を全て挙げると、冒頭の「十二経本一脈」の題下には「一首。集次見東垣『医学発明』」、続く「奇経八脈」には「一首。集次見『内経』骨空論等篇」とある。前者は金代の以下李東垣(李杲。1180～1251)の『医学発明』を本とし、後者は少なくとも『黄帝内経素問』骨空論篇に基づくことを記しているのである。さらに続けて「十二経脈」と題する歌の下には「十二首。集次見『靈枢』経脈論」といい、「十五絡脈」には「一首。出『鍼経』」、「経脈交会八穴」「経穴起止」の下には「一首。同前」とある。前者は『靈枢』の経脈篇等に基

づき、後者の『鍼経』はこの場合、金代の竇漢卿（竇黙）の『鍼経指南』（1312 年）を指す。続く「十二経気血」下には「一首。集見『内经』形志篇」とあるが、これは『黄帝内经素問』血気形志篇第二十四に基づいたことを示す。「十二経井榮俞経合穴」の下には「一首。出『鍼経』」といい、それを受けて「経脈流注」「十二経納甲」には「一首。同前」とある。卷之三最後の歌訣である「周身経穴賦」の下には出典は無い。『黄帝内经』は有韻の文を含む散文であることは前述したが、古くは『黄帝内经』、新しくは金代の医家の作が引用されているのがわかる。

この時期に、これまでの医学の蓄積を用いて歌訣を創作したのは、劉純一人に限らない。そこで次に、今一度『医経小学』より時代を遡り、金代以降における鍼灸に関連した歌賦を対象として、その具体的なあり方を見直しつつ、再び時代を下ることとしよう。

V 元明代の鍼灸歌賦概観

『医経小学』卷三に「周身経穴賦」という名の「賦」が収録されていることはすでに述べた。現存する史料を見る限り、「（脈法）讃」「（百証）歌」のように、一句の字数を揃えた歌訣が先行して世に現われた。特に「賦」については、金元代がその発生期と見られる。

中国伝統医学の歴史を顧みれば、金元代は「医学争鳴²³」の時代であった。「金元四大家」と呼ばれる劉完素（1120～1200）・張從正（1156～1228）・李杲（1180～1251）・朱震亨（1281～1358）が特色ある治療学説を展開して活躍していた。それぞれの主張は治療の基本方針から「寒涼派」「攻下派」「補土派」「滋陰派」と称される。彼らは医療の方法として湯液のみならず鍼灸も用いた。各家が独自の学説を展開すれば、医学への入門者も増えたであろうし、社会的な関心も高まったに違いない。鍼灸歌賦の形成には、こうした医学内部における要請が高まったという動向を背景として考える必要がある。一方、文学史に目を転ずれば、詩の担い手の底辺が社会的に拡大したその傾向は²⁴、医療従事者へも及んだことが推測され、これもまた「鍼灸歌賦」を生み出す時代の原動力に加わっていたと仮定することは比較的容易なのである。

鍼灸に関する歌訣は、実際は多数あったのかも知れないが、現伝のそれらはそう多くはない。当該時期の鍼灸書に、一つの歌賦が何度も収録されているのが看取される。鍼灸書間の「賦」「歌」の貸借関係について、前述の『医経小学』を含め、同時期の鍼灸書を数種類選り、対照したのが表 1～3 である。表に使用した鍼灸書について、『書名』、時代、作者・编者、目安となる事項と年代を以下に記す²⁵。

『子午流注鍼経』 金・閻明広 貞元癸酉（1153年）頃「流注指微鍼賦」を得る。
『扁鵲神応鍼灸玉龍経』（以下『鍼灸玉龍経』と略す）元・王国瑞 天曆己巳（1329年）より四十年程前に成書。
『鍼経指南』 金元・竇漢卿（1196～1280年） 皇慶壬子（1312年）頃刊行。
『医経小学』 明・劉純 洪武戊辰（1388年）編成。
『普濟方』 明・朱橚 洪武庚午（1390年）編成。
『鍼灸大全』 明・徐鳳 成化～正徳（1465～1521年）成立。「金鍼賦」序に「正統四年（1439）」。
『鍼灸聚英』 明・高武（嘉靖年間に武挙） 嘉靖己丑（1529年）成書。
『楊敬斎鍼灸全書』（以下『鍼灸全書』と略す） 明・陳言 万曆辛卯（1590年）刊行。
『鍼灸大成』 明・靳賢 万曆辛丑（1601年）刻。

ここで表1・2について説明しておきたい。歌賦収録数が最多で、賦は十、歌は八十二を数える『鍼灸大成』を基準として考えた。『鍼灸大成』が最も年代が新しいことから、最も右の欄に、同書による賦名・歌名を記した。横軸には他の鍼灸書を配したが、左から時代順に示したことで、歌賦名の変化について時間を追ってたどり、『鍼灸大成』にゆきつくことができる。『鍼灸大成』と同題或いは異題同文の歌賦があれば「(巻x・) 題名」のように記し、同名異文の歌賦を収録してあればその旨記した。

表1に見えるとおり、複数書に渡って引用される「賦」は十首にとどまり、これ以外の「賦」はほとんど見られない。上記の書に限るならば、『鍼灸聚英』にのみ、他書にはない一首が記されている。一つの鍼灸書は、これら十首から数首を選んで掲載されることが多いが、最も多く引用されたのは「標幽賦」であり、最も早期の「賦」は、1153年には既に成っていたと見られる「流注指微（鍼）賦」である。

表2には「歌」の貸借関係をまとめた。『子午流注鍼経』と『普濟方』は、「歌」についてはそれぞれ一首が収録されているのみであるために、表1には記したが表2には挙げなかった。『鍼灸大成』でいう「八法五虎建元日時歌」がその一首であり、『子午流注鍼経』では「五子元建日時歌」、『普濟方』では卷四百十三に「五子元建日時調」と題して収録されている。また、表題に「歌」と称されたもののみに限って取り上げ、内容は踏襲されていても歌訣の名称と形によらない場合はここでは省いている。

三種以上の鍼灸書に引用されている、言い換えるならばよく行われたと考えられる「鍼灸歌」は三十種ほどとなる。『鍼灸大成』六巻にいうところの「手太陰肺経穴歌」以下十

二の経脈に属す経穴を連ねた歌訣を十二種と数えるならば四十種ほどということもできる。歌訣を内容から分類するならば、経脈・経穴を歌うもの、治療法に関わるもの、日忌を含めて主に治療における時間の禁忌を記すものとなろうか。これらは、特に鍼灸史におけるエポックを示すものとして、医史学の観点から、歌訣の形式をとるか否かに拘らずに詳述されなければならないことは言うまでもないが、本稿ではその話題については措く。

以下に、音韻学的な面に着目した場合に興味深い点を包含している、三つの歌訣を選びいささか分析を試みることにする。

VI 金元明の鍼灸歌賦の実際

1) 『子午流注鍼経』と『流注指微鍼賦』

金代の医家である閻明広が撰した『子午流注鍼経』²⁶という鍼灸書がある。閻明広の生卒年は明らかではない。上中下三巻から成り、巻上には「流注指微鍼賦」が収録され、「南唐 何若愚撰／常山 閻明広注」と同賦の作者と注釈者を示す。巻中には「五子元建日時歌」が収録され、巻下には「井榮歌訣六十首」「五行造化歌」が収録されている。

この「流注指微鍼賦」は閻明広の注釈とともに流行した。閻明広は『子午流注鍼経』序の中で「近有南唐何公、務法上古、撰指微論三卷、探経絡之源、順鍼刺之理、明榮衛之清濁、別孔穴之部分、然未広伝于世。又近于貞元癸酉年間、收何公所作指微鍼賦一道、敘其首云、皆按指微論中之妙理、先賢秘隠之枢機、復增多事、凡百余門、悉便于討閱者也…」ということから、何若愚は金の貞元癸酉年間（1153年）前後の人であり、賦は同年間に製作されていたこととなる²⁷。

「流注指微鍼賦」題下には「以鍼医訣式流注指微八字為韻」とあり、「流注指微鍼賦」が「鍼・医・訣・式・流・注・指・微」八字を用いて押韻されていると考えられる。

そこでまず、その八文字について、これまでと同様に郭錫良の『漢字古音手冊』によって音価推定を示し、併せて寧繼福の『中原音韻表稿』の音価推定によって記す。

漢字	郭錫良による『広韻』の 声・韻・開合・等・声調・ 撰、推定音価	寧繼福による『中原 音韻』韻・開合・等、 推定音価	漢字	郭錫良による『広韻』の 声・韻・開合・等・声調・ 撰、推定音価	寧繼福による『中原 音韻』韻・開合・等、 推定音価
鍼	書侵開三平深 cɿēm	侵尋平陰 tɕiəm	流	来尤開三平流 liəu	尤侯平陽 liəu
医	影之開三平止 iə	齊微平陰 i	注	章遇合三去遇 tɕiʊ	魚模去声 tɕiʊ

訣	見屑合四入山 kwiet	車遮入上 kiuε	指	章旨開三上止 tɕi	支思上声 tɕɿ
式	書職開三入曾 cɿɔk	(齊微入上 ɕi)	微	明微合三平止 miwəi	齊微平陽 Uui

「式」字は『中原音韻』には収録されない。『広韻』において小韻を同じくし声・韻・開合・等が同様に「書職開三」である「拭」字は収録されているため、同字から推測すれば「式」字は『中原音韻』において「齊微韻で、入声から上声へ変化した字」とであると仮定した。『広韻』で見れば八字ともに所属する韻が異なっているのだが、『中原音韻』によれば同じ「齊微」韻に分かたれる文字が八文字中「医」「式」「微」の三文字もあることになる。少なくとも何若愚は、『広韻』に基づいて同賦を作ったと考えたほうがよいであろう。

ここで「流注指微鍼賦」の全体を引用することにする²⁸。「鍼・医・訣・式・流・注・指・微」各段を区切り、各段当該押韻字に下線をつけ、各段落の末に当該段の押韻を〔〕で示すこととする。

疾居榮衛、扶救者鍼。觀虛実與肥瘦、辨四時之淺深。取穴之法、但分陰陽而谿谷。迎隨逆順、須曉氣血而升沈。〔以上「鍼」字により押韻。『広韻』では「平声・侵」、『中原音韻』では「侵尋平陰」〕

原夫指微論中、蹟義成賦。知本時之氣開、說經絡之流注。每披文而參其法、篇篇之誓審存、覆經而察其言、字字之功明諭、疑隱皆知、虛実総附。移疼住痛如有神、鍼下獲安。暴疾沈痾至危篤、刺之勿誤。〔以上「注」字により押韻。『広韻』では「去声・遇」、『中原音韻』では「魚模去声」〕

詳夫陰日血引、值陽氣流。口温鍼暖、牢濡深求。諸經十二作数、絡脈十五為周。陰愈六十臟主、陽穴七十二腑收。刺陽經者、可臥鍼而取。奪血絡者、先俾指而柔。呼為迎而吸作補、逆為鬼而從何憂。淹疾延患、著灸之由。躁煩葉餌而難拯、必取八会。癰腫奇絡而畜邪、先由砭瘻。〔以上「流」字により押韻。『広韻』では「平声・尤」、『中原音韻』では「尤侯平陽」〕

況乎甲胆乙肝、丁心壬水。生我者号母、我生者名子。春井夏榮乃邪在、秋經冬合乃刺矣。犯禁忌而病復、用日衰而難已。孫絡在于肉分、血行出于支裏。悶昏鍼運、經虛補絡須然。疼実痒虛、瀉子隨母要指。〔以上「指」字により押韻。『広韻』では「上声・旨」、『中原音韻』では「支思上声」〕

想夫先賢迅效、無出于鍼經。今人愈疾、豈離于明医。徐文伯瀉孕于苑内、斯由甚速。范九思療咽于江夏、聞見言稀。大抵古今遺跡、後世皆師。王纂鍼魅而立康、獺從被出。秋夫療鬼而獲效、魂免傷悲。〔以上「医」字による押韻。『広韻』では「平声・之」、『中原音韻』では「齊微平陰」〕

既而感指幽微、用鍼直訣。竅齊于筋骨、皮肉刺要。痛察于久新、腑臟寒熱。接氣通經、短長依法。裏外之絶、羸盈必別。勿刺大勞、使人氣乱而神隳。慎妄呼吸、防他鍼昏而閉血。〔以上「訣」字により押韻。『広韻』では「入声・屑」、『中原音韻』では「車遮入上」〕

又以常尋古義、由有藏機。遇高賢真趣、則超然得悟。逢達人示教、則表我扶危。男女氣脈、行分時合度。養子時克、注穴穴必須依。〔以上「微」字により押韻。『広韻』では「平声・微」、『中原音韻』では「齊微平陽」〕

今詳定療病之儀、神鍼法式、広搜難素之秘密文辞、深考諸家之肘函妙臆、故称瀘江流注之指微、以為後学之規則。〔以上「式」字により押韻。『広韻』では「入声・職」、『中原音韻』では「齊微入上」〕

内容は鍼灸に関する概説といったところであり、「鍼・医・訣・式・流・注・指・微」八字によって確かに押韻されている。

さらに偶数句にとどまらず、各句末字に着目すると、各字による一段の前後の段においても、同様の韻をもつ字が使用されているのがわかる。表4に、押韻していると見られる各句末字の推定音価を一覧したのでご覧頂きたい。例えば、七段落目は「微」字で押韻すべき段であるが、その前段六段落目において同韻の「尋」字が使われている。こうした句末字の韻の使用法は「流注指微（鍼）賦」を通じて見られる現象である。全体で五百三十余字、句読は百箇所のうち、『広韻』『中原音韻』いずれかに拠れば押韻すると看做される句末字は六十七字となり、単純に計算すれば六十七パーセントの句末が押韻していることになる。

こうしたより多くの句末を押韻しようとする処置は、全体を通して統一感を高める効果を「賦」全体に与えたであろうし、記憶にさらに便にもなったであろう。

「流注指微（鍼）賦」は、元代の音韻体系の変化を通過して後代に残った賦である。このことは『広韻』の拘束力²⁹の及ぶ範囲を明らかにする問題として考えられなければならないが、実際に発音されることを考える時、成立当時のそれは『広韻』による推定が妥当であり、流伝する過程としての十三世紀以降については『中原音韻』を基に考えられるのが妥当と考えておきたい。このことは当該賦の文字の異同に深く関わると思われる。

入声の消失後、「鍼・医・訣・式・流・注・指・微」の八字の押韻による分段はそれほど明確ではなくなったであろう。それは何若愚の意図したこの賦のあり方とは異なっていたかも知れない。ただ、口誦に供されることを考えた場合には、「医」「式」「微」三字分の句末字が全て「齊微」韻で占められていることで、さらに統一的で滑らかな口調の賦になっていた可能性が否定できないのである。「脈法讃」もそうであったが、時代を超えて引き継

がれる歌訣においては、その押韻における整合性も長く流行するために機能している場合が多かったと思われる。

『中原音韻』について藤堂明保は「江西高安の周德清（字は挺齋）は、詞曲の押韻字を集めて『中原音韻』をえらんだ。〈詞曲〉は当時の通俗文学であるから、口語に基づいた押韻法をしており、それを材料とした『中原音韻』は『礼部韻略』式の保守的な韻書とは全く違う」と記した³⁰。鍼灸賦は、「詞曲」と同様に、或いはそれ以上に通俗なものであったと考える。その押韻の仕方は、偶数句に拘らずできる限り多くの句末を揃え、発音と口調の統一性、記憶のしやすさを追求する傾向を企図していたということではないだろうか。発音の文学的ではないにせよ、口調の統一性を合目的的に追求したものであり、文学的ではないがそれゆえに、より日常的で実際的な押韻字の用い方を伝える資料であるという可能性は大いにあると思われるのである。

2) 『十四経發揮』と経脈穴位歌

表2所収の鍼灸歌で、『子午流注鍼経』以外全ての鍼灸書に収録してあるにも関わらず、表中の鍼灸書にはその出典と考えられる書籍が含まれていない歌訣がある。

『鍼灸大成』でいえば「手太陰肺経穴歌」より始まる、十二の経脈に所属する経穴を連ねた歌訣である。総称して「経脈穴位歌」と仮に呼んでおくが、少々文字の異同は見られるにせよ、元明の鍼灸書に多く収録されている。『鍼灸大成』は出典を『医学入門』としている。同書の作者は李梴、鍼灸のみならず、さらに広い内容を包括する総合性医書であるが、隆慶五年（1571）年に編まれ、万暦年間に成立した本である。「経脈穴位歌」には、『医学入門』以外に出典があると考えるのが妥当である。

その出典は、『十四経發揮』に求められる。その巻中は、経脈ごとに、経脈図と経脈穴位歌、さらに経脈の流注を記した、いわば「経脈・経穴巻」となっている。

同書は元代の鍼灸科教授忽泰の『金蘭循経取穴図解』を土台として、滑寿（1304-1386）が補注・改編を加えて作成した書籍といわれる。忽泰が記した部分と、滑寿が新たに増やした部分とがあるが、おそらくこの経脈穴位歌部分は、滑寿のものであろう。黄龍祥『針灸名著集成』では、同書のテキストを「日本寛永2年（1625）刻本」を底本とし、対校として中国では最古の版本である『薛己医案 24 種』に収録されている明・万暦刻本と、日本国立公文書館内閣文庫所蔵の『医学集覽』所収本とを用い、参考として日本・寛政10年本を使って作っている³¹。日本で善本が作成・保存されるように、日本鍼灸への影響も絶大であった。その医学史上のエポックは、経脈上に経穴が点々と存在する「腧穴帰経法」といわれる経穴の記述方法が同書によって成立したと考えられることであり、その方法は、

現在に至るまで使用されている。滑寿には『診家枢要』という著書もあるが、同書の陳贄序（天順七年）に、「先生所著書有『十四經發揮』、編纂『靈樞』『素問』、集諸家本草為歌韻、及『診家枢要』皆已板行」とあることから、滑寿の韻文には一定の評価がなされていたと見るべきであろう。

では、『十四經發揮』所収の經脈穴位歌について、各句末の文字について押韻されているかどうかを調べてみよう。これまでと同様に、『広韻』『中原音韻』を用いる。まず經脈の循行の起点である「手太陰肺經」の經脈穴位歌をみてみよう。五句七言、三句目の「存」は押韻されていないため表から省く。

手太陰肺經穴歌

手太陰肺十一穴、中府雲門天府列、俠白尺沢孔最存、列缺經渠太淵涉、魚際少商如韭葉。

句末 漢字	郭錫良による『広韻』 の声・韻・開合・等・ 声調・撰、推定音価	寧繼福による『中原音韻』 韻・開合・等、推 定音価	句末 漢字	郭錫良による『広韻』 の声・韻・開合・等・ 声調・撰、推定音価	寧繼福による『中原音韻』 韻・開合・等、 推定音価
穴	匣 屑 合 四 入 山 viwet	車遮入去 xiε	涉	禪葉開三入咸 ziεp	車遮平陽 siε
列	来薛開三入山 liεp	車遮入去 liε	葉	余葉開三入咸 jiεp	車遮入去 iε

「穴」「列」の小韻「屑・薛」は『広韻』では同用である。「涉」「葉」は、いずれも入声で韻は「葉」である。『広韻』では前後での換韻に見えるが、『中原音韻』では四字ともに同韻となる。一韻到底で平板になるところを、むしろ三句目での踏み落としによって救われ、記憶するために便になっているとも見える。

手太陰肺經の十一の經穴とは、「中府」「雲門」「天府」「俠白」「尺沢」「孔最」「列缺」「經渠」「太淵」「魚際」「少商」である。この「手太陰肺經穴歌」の押韻については、經穴名は一字も押韻に与ってはいない。二句目と四句目では經穴が「列なる」「涉る」と続けるために動詞が添えられたのみである。少商穴の位置を示すのに使われる爪甲から「韭の葉³²の如し」という場合の「葉」は、比較的変更ができにくい文字ではあり、「涉」といずれの文字が先に決定したかといえ、やはり「葉」字であったと思われる。

經脈の連続することによって「手太陰肺經」の次には「手陽明大腸經」の經脈穴位歌がある。これも挙げてみる。

○手陽明大腸經穴歌

手陽明穴起商陽、二間三間合谷蔵、陽谿遍歴歴温溜、下廉上廉三里長、曲池肘髃迎五里、臂臑肩髃巨骨当、天鼎扶突禾髃接、終以迎香二十穴。

句末の押韻字について再び『広韻』『中原音韻』の音について考慮してみよう。「手太陰肺經穴歌」と同様に、一見して押韻していない文字は表から省いてある。それは「溜」「里」であり、『広韻』において前者は去声、韻は宥、小韻は「溜」、「里」は上声、止の韻で、小韻「里」である。

句末 漢字	郭錫良による『広韻』 の声・韻・開合・等・ 声調・撰、推定音価	寧繼福による『中原音韻』 韻・開合・等、推 定音価	句末 漢字	郭錫良による『広韻』 の声・韻・開合・等・ 声調・撰、推定音価	寧繼福による『中原音韻』 韻・開合・等、 推定音価
陽	余陽開三平宕 ɿiɑŋ	江陽平陽 iɑŋ	当	端唐開一平宕 taŋ	江陽平陰 taŋ
蔵	従唐開一平宕 dzɑŋ	江陽平陰 tɕ 'ɑŋ	接	精葉開三入咸 tsiɛp	車遮入上 tsiɛ
長	澄陽開三平宕 dʑiɑŋ	江陽平陽 tɕ 'iɑŋ	穴	匣屑合四入山 ɣiwet	車遮入去 xiɛ

前六句は『広韻』では平声・陽または宕の韻で整えられており、末尾二句は入声で押韻されている。『中原音韻』で見ても、六句と二句で換韻されることに変わりはない。

「手陽明大腸經」には二十の經穴が含まれるが、それらはつまり「商陽」「二間」「三間」「合谷」「陽谿」「遍歴」「温溜」「下廉」「上廉」「三里」「曲池」「肘髃」「五里」「臂臑」「肩髃」「巨骨」「天鼎」「扶突」「禾髃」「迎香」であるが、押韻にあずかったのは「商陽」の「陽」字のみである。

上記二首の經脈穴位歌によって、同内容の歌には一定の傾向があることがわかる。原則的に押韻は經穴名でなく、經脈上に經穴が配置したり連続したりすることを示す動詞などを補足して踏むことが多いが、押韻しやすい文字が經穴名に含まれている場合には僅かに押韻に与ることがある。この補足字によって、經脈穴位歌は七言詩の体裁をとるが、奇数句で終わることもある。七言という文字数は、二文字の多い經穴名を列挙し、最小限の動詞の補足をしただけで詩の体裁を為す、都合のよいものであり、經穴を經脈に沿って列挙する場合に関しては、「賦」でなく「歌」の形式をとることが合理的であったともいえよう。テーマが經穴であるだけに、「穴」字で押韻することも多く、『広韻』では入声韻、『中原音韻』では「車遮」韻で「列」「接」などと押韻字のセットができている場合がある。押韻は、

二句続けて同韻で整え、一句踏み落とし、再び押韻するか換韻することもある。これは本稿では取り上げないものの、経脈穴位歌全てに共通して見られる傾向と言ってもよい。これら全てが、経穴をより覚えやすく口調をよくするための工夫であったと思われる。こうした厳密でないがより押韻句を増やそうとしたことが、現実的に暗誦に役立ってきた可能性が高いと思われる。

3)『鍼灸聚英』と「八法八穴歌（西江月調）」

『鍼灸聚英』の作者・高武は、嘉靖年間に武挙に挙げられたこともある医家である。

『聚英』には賦九首、歌二十八首が収録されているが、この「八法八穴歌」にのみ、題下の原注に「西江月（調）」と曲調が記されている。言うまでもなく「西江月」は詞牌の一つであり、歌訣の中で少なくとも同歌については節をつけ歌われることを想定していたと仮定し得る³³。

「西江月」は、双調で一～二句に対句を含み、同一韻部内での平仄換韻の規則がある。「西江月」の平仄を、記号を使って示す。○は平声、●は仄声、△は原則平声であるが仄声も可能な文字、▲は原則仄声であるが平声も可能である文字を、以下のように組み合わせて作るのがこの曲調であるという。

▲●△○▲●／△○▲●○○平／△○▲●●○○平／▲●△○▲●仄
▲●△○▲●／△○▲●○○平／△○▲●●○○平／▲●△○▲●仄

「八法八穴歌」の「八穴」とは奇経八脈の交差したところを指し「八脈交会穴」とも呼ばれる。「八法八脈歌」は、八脈交会穴の各一穴ごとに前後二關を備えることで、「八法八穴歌」を構成している。

そこで、平声を○、仄声を●の記号として表わし、以下に記した。漢字につけた下線は交会穴の名を示し、記号の下の下線はその部分が平仄にあって示す。また、特に句末字を取り出し表5としたので参照されたい。押韻字でなくとも押韻する場合はそれも含めた。() 内は当該韻書にない文字の音価を推測して記したものである。

九種心疼涎悶、結胸翻胃難停、酒食積聚胃腸鳴、水食氣疾膈病、
 ●●○○○● ●○○●○○ ●●●●○○ ●○○●●●
 臍痛腹疼脇脹、腸風瘡疾心疼、胎衣不下血迷心、泄瀉公孫立応。
 ○●●○○● ○○●○○○ ○○●●●○○ ●●○○●●

中滿心胸痞脹、腸鳴泄瀉脫肛、食難下隔酒來傷、積塊堅橫脇搶、

○●○○○●● ○○●●○○○ ○○●●●○○ ●●●○○●●

婦女血痛心疼、結胸裏急難當、傷寒不解結胸堂、瘧疾內閔獨當。

●●●●○○○ ●○○●○○○ ○○●●●○○ ●○○○○●●

手足中風不舉、痛麻發熱拘攣、頭風痛腫項腮連、眼腫赤痛頭旋、

●●○○○●● ●○○●○○○ ○○●●●○○ ●●○○○○○

齒痛耳聾咽腫、浮風搔癢筋牽、腿疼脇脹肋肢偏、臨泣鍼時有驗。

○●●○○○● ○○○●○○○ ●○○●●○○ ○●○○○○●

肢節腫痛臂冷、四肢不遂頭風、背脊內外骨筋攻、頭項眉稜皆痛、

○●●●○○● ●○○●○○○ ●○○●●○○ ○●●○○○●

手足熱麻盜汗、破傷眼腫睛紅、傷寒自汗表烘烘、獨會外閔為重。

●●●○○●● ●○○●○○○ ○○●●●○○ ●●●○○○●

手足急攣戰掉、中風不語癱癲、頭疼眼腫淚漣漣、腿膝背腰痛遍、

●●○○○●● ○○●●○○○ ○○●●●○○ ●●●○○●●

項強傷寒不解、牙齒腮腫喉咽、手麻足麻破傷牽、盜汗後谿先砭。

●○○○○●● ○●○○○○○ ●○○○●○○ ●●●○○○●

腰背強痛腿腫、惡風自汗頭疼、雷頭赤目痛眉稜、手足麻攣臂冷、

○●○○●●● ●○○●○○○ ○○○●●●○ ●●○○○●●

吹乳耳聾鼻衄、癰癰肢節煩憎、遍身腫滿汗頭淋、申脈先鍼有應。

○●●○○●● ○○○●○○○ ●○○●●○○ ○●○○○○●

痔瘡便腫泄利、唾紅溺血欬痰、牙痛喉腫小便難、心胸腹疼飲噎、

●●●●●●● ●○○●●○○ ○●○○●●○○ ○○●○○●●

產後發強不語、腰痛血疾臍寒、死胎不下膈中寒、列缺乳癰多散。

●●○○○●● ○●●●○○○ ●○○●●○○ ●●●○○○●

喉塞小便淋瀝、膀胱氣痛腸鳴、食黃酒積腹臍并、嘔瀉胃翻便緊、

○●●●○● ○○●●○○ ●○●●○○ ●●●○●●

難産昏迷積塊、腸風下血常頻、膈中決気気瘀侵、照海有功必定。

○●○○●● ○○●●○○ ●○●●○○ ●●●○●●

八脈交会穴の主治症がまとめてあり、主治症つまり疾病名も経穴名と同様に変更はできない。その拘束にあっても上記のとおり、平仄のみに着目すれば、全四百字中で平仄にかなわない文字は九字にすぎない。押韻字のみを見れば、關を単位として数えて十四關分は整えてある。ただし、同一韻部内での平仄換韻が守られているのは『広韻』を基準にすれば六關、『中原音韻』を基準にすれば八關である。また、押韻の必要のないはずの一句目にも押韻されている場合がある。「西江月」に似せたのみであることは明らかであるが、疾病名の拘束があることを考えれば、押韻可能な句はできる限り押韻しようとする傾向が認められる。口調を整えて記憶に便にするための配慮であろう。

VII 終わりに

本稿ではまず、「鍼灸歌賦」について『黄帝内経』から『鍼灸大成』までを概観した。歴史的な傾向としては、有韻の散文から、脈診に関わる「脈法讃」が整えられ、ほぼ一冊を治療法に関する歌訣でまとめた『傷寒百証歌』が編まれ、その後に鍼灸歌賦が整えられた経緯が認められ、鍼灸における経脈穴位歌や症状を読み込んだ歌が流行した。

特に流行した歌賦は、当該時代もさることながら、次代において音韻体系の変化が起こったとしても対処できるように韻が整えられており、それによって確保された口調のよさが時代を超えての流行につながったと推測できる。歌賦全体において、押韻可能な句については、いずれの句末であろうとも押韻しようとする傾向があるが、これは口調を整え暗誦に役立てるための工夫であったと考えられる。

鍼灸歌賦は文学的な作品とは言えないが、医史学的なそれのみならず、音韻学的な資料の一つとしても、さらに検討される必要があると思われることを記しておきたい。

¹総主編・王雪苔、主編・沈霍夫。湖南科学技術出版社刊、1993年。

²「はりきゅう」について、中国では「針灸」と表記し、日本では「鍼灸」と表記する。日本における表記は鍼灸界が裁縫用の針と差別化をはかるために採用したものである。「しに

か」vol. 8/No. 11 (1997 年)「特集：漢方入門小事典」p19 を参照のこと。本稿は日本語表記のため「鍼」に統一した。なお、現代中国語を引用するに当たっては、簡体字を日本で使用されている漢字に改めてある。

³人民衛生出版社刊、1990 年 6 月第 1 版。

⁴原文は「《内経》通体而觀之，係一部散文著作、不是一部韻文著作、但具体而微地对該書の語言進行分析觀察、在以散文体為主要表現形式之中、又有許多、甚至是大量的有韻之文」である。

⁵拙稿『『黄帝内経』所引の古医書について』（「集刊東洋学」第 69 号、p18～41、1993 年）

⁶郭錫良『漢字古音手冊』（1986 年第一刷）では、「堂＝禪陽 ziaŋ」「定陽 daŋ」「陽＝余陽 ʌiaŋ」「常＝禪陽 ziaŋ」「行＝匣陽 veaŋ」「明＝明陽 miaŋ」と推定する。

⁷前掲書 p282～293「第六節 明・行・風三字的韻部転変」を参照されたい。

⁸「賛」という文体については、呉訥『文章弁体序説』に「…厥後（司馬相如の荊軻賛を指す。筆者）班孟堅漢史以論為賛、至宋范曄更以韻語…（中略）…大抵賛有二体、若作散文、当祖班氏史評、若作韻語、当宗東方朔画象賛…」といい、徐師曾『文体明弁序説』に「劉勰有言、賛之為体、促而不曠。結言於四字句、盤桓乎数韻之辞、其頌家之細條也。可謂得之矣」という。「脉法讚」は四字句押韻の体を為す。両書は『文章弁体序説・文体明弁序説』（人民文学出版社、1982 年）を用いた。

⁹人民衛生出版社、1984 年。引用は p17。

¹⁰前掲『内経語言研究』第四章・从音韻上考察《内経》的成書時代・第一節の「魚与侯」（p251～266）という。

¹¹『脈経』は、倣宋版（東洋医学研究会、1983 年刊）を用いた。『備急千金要方』は、オリエント出版社「東洋医学善本叢書」所収（1989 年）の宋版を用いたが、それによれば 21～22 句は「三陰三陽、誰先誰後」に作り、21 句目の注に「一云按察陰陽」とあり、23～24 句目の注釈にそれぞれ「官、藏内也」「府、外也」とある。ちなみに『備急千金要方』は北宋の改編を経ているので、同社同叢書所収の、宋改を経ない『孫真人千金方』で確認すると、23 句目は「陰病治宮（注：宮藏内也）」と読める。

¹²テキストとして早稲田大学所蔵『重鵠註解仲景傷寒百証歌発微論』

www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/ttml/ya09/ya09_00179を用いた。許叔微の著書としては『宋史』藝文志所載の『普濟本事方』十二巻が挙げられる。

¹³朱建平「医学名詞“症”“徵”“証”的規範使用」『科技術語研究』2003. (4):p14～p17 に「一般認為，証是在疾病過程中一定階段的病位、病因、病性、病勢及機体抗病功能等本質變化的概括。証概念的内涵，随着學術的發展還在不斷地變化」という。

¹⁴前掲書 p201。

¹⁵郭錫良原文は「ɕiěk」に作るも、誤植と判断し訂正した。

¹⁶史常永ほか点校『劉純医学全集』（人民衛生出版社、1986 年）前言に記された推測と本書序文より。本書については、上記点校本のほか日本の宮内庁書陵部所蔵の『重編医經小学』（オリエント出版社、1997 年影印刊行）を参考とした。

¹⁷拙稿「歴代史志書目における医書の範疇と評価」『日本中国学会報』第 50 集（1998 年）を参照のこと。

¹⁸当該時代も『広韻』が重視されていたと考えられる。大岩本幸次『金代字書の研究』（東

北大学出版会、2007 年刊) 序章 p9 を参照。

¹⁹『素問』標本病伝論篇第六十五に「知標本者、万举万当。不知標本、是為妄行」という。

²⁰東北大学附属図書館蔵『元本中原音韻』を使用した。

²¹拙稿「うたっておぼえるツボの文化」「アジア遊学」No.105 所収、2007 年。なお当該拙稿の執筆に際し、東北大学文学部教授花登正宏教授よりご指導を賜った。本稿はその当時のご指導の記憶に基づき製作した。なお、『医経小学』凡例には「毎篇歌括…余則皆純窃取諸經意而成…」とあり、歌賦の製作が劉純の手になることがわかる。

²²原文に「要」は無いが、『黄帝内経素問』第 74 篇の題より補う。諸篇とあるので運氣論諸篇を指す可能性もある。

²³『中国医学通史・古代卷』(人民衛生出版社、2000 年) より「第 8 章・遼夏金元時期医学」第三節 p405～416 は「医学争鳴与学术流派」に当てられる。金元四大家については『金元四大家医学全集(上下)』(天津科学技術出版社、1992 年) を参照のこと。

²⁴吉川幸次郎『元明詩概説』(岩波書店、第一刷は 1963 年) を参照のこと。

²⁵鍼灸書の成立については、原則として黄龍祥主編『針灸名著集成』(華夏出版社、1996 年) を参考とした。また、テキストも原則的に同書に従った。

²⁶当該書については、李鼎・李磊校訂『子午流注針經』(上海中医学院出版社、1986 年)、前掲『針灸名著集成』を参照されたい。前者は宋代の「干支象数之説」の流行を受けて本書が成立したと考え(附篇・一 子午流注針法の源流、(一) 何若愚是什麼時候人 p95)、成立を宋末元初とする。

²⁷同書は『普濟方』卷四百九・針灸門に『流注鍼經』の名で収録されているが、その「燕山 牛良祐」の序末にも「貞元元年」(1153) と記されている。

²⁸「流注指微鍼賦」は何若愚の賦と閻明広の注文ともに文字の異同が多い。口誦によって伝承され、経過する時代が長く(音韻体系にも変化が起こり)、掲載される書籍も多かったことがその理由であろう。本稿では、表 1 に示した鍼灸書の所収する同賦と校勘し、その結果基本的には欽定四庫全書『普濟方』を採用したが、特に第二段落の中に校勘結果と押韻により、注釈の一部を賦とした部分がある。さらに李鼎・李磊校訂『子午流注鍼經』を参考に決定した。李鼎・李磊は『子午流注鍼經』については天一閣本・葉氏広勤書堂刊本重抄本、さらに表 1 に引用した鍼灸書との比較校勘を行い、八字の押韻に着目して分段している。

²⁹唐詩における韻書の拘束力については小川環樹『中国語学研究』(昭和 52 年、創文社) 所収「唐詩の押韻一韻書の拘束力」(第一部・音韻史考説 p 87～p 115) に触れられている。

³⁰藤堂明保『中国語音韻論一その歴史的研究』(光生館、1980 年初版) p108。

³¹本稿では「薛己医按本」を底本とした。

³²『鍼灸甲乙經』卷三には「少商者、木也。在手大指端内側、去爪甲如韭葉、手太陰脉之所出也。為井、刺入一分、留一呼、灸一壯」という。

³³「宋詞」については村上哲見『中国詩文選 21 宋詞』(筑摩書房、昭和 48 年)、『宋詞研究』(昭和 51 年、創文社) を参照し概観した。

表1 『鍼灸大成』を基準としてみた各鍼灸書の鍼灸賦の出入関係

『子午流注鍼経』	『鍼灸玉龍経』	『鍼経指南』	『医経小学』	『普濟方』	『鍼灸大成』	『鍼灸聚英』	『鍼灸全書』	『鍼灸大成』巻・歌賦名(原注)	
×	×	×	巻之三・同	×	巻一・同	×	巻之上・同	周身経穴賦 (医経小学)	巻2
×	×	×	×	×	×	巻四・百証賦	×	百症賦(聚英)	
×	～註解	鍼経標幽賦	×	巻四〇九・鍼経標幽賦	巻一・同	巻四・同	巻之上・同	標幽賦(楊氏註解)	
×	×	×	×	×	巻一・同	巻四・同	巻之上・同	席広賦(鍼灸大成)	
×	×	×	×	×	巻五・梓岐風谷飛経撮要金鍼賦	×	巻之上・梓岐風谷飛経撮要金鍼賦	金鍼賦(楊氏註解)	
×	×	×	×	×	×	巻四・同	×	玉龍賦(聚英)	巻3
×	×	流注通玄指要賦	×	巻四〇九・流注通玄指要賦	巻一・同	巻四・同	巻之上・同	通玄指要賦(楊氏註解)	
×	×	×	×	×	巻一・同	巻四・同	巻之上・同	靈光賦(鍼灸大成)	
×	×	×		×	×	巻四・攔江賦	×	蘭江賦(楊氏集)	
流注指微鍼賦	×	×	×	巻四〇九・流注指微鍼賦	巻一・同	巻四・流注指微賦	巻之上・同	流注指微賦(寶氏)	
×	×	×	×	×	×	巻四・銅人指要賦	×	×	

表2 『鍼灸大成』を基準としてみた各鍼灸書の鍼灸歌の出入関係

『鍼灸玉龍経』	『医経小学』	『鍼灸大全』	『鍼灸聚英』巻四	『鍼灸全書』巻下	『鍼灸大成』歌賦名(原注)・巻数	
×	病機第四・五運主病	×	×	×	五運主病歌(医経小学)	巻3
×	病機第四・六氣為病	×	×	×	六氣為病歌	
×	×	×	×	×	百穴法歌(神応経)	

×	×	×	十二経脈歌	×	十二経脈歌（聚英）	卷 4
一百二十穴玉龍歌	×	×	×	×	玉龍歌（楊氏註解）	
×	×	×	×	×	勝玉歌（楊氏）	
×	×	×	×	×	雜病穴法歌（医学入門）	
×	×	卷一・治病十一証歌	雜病十一穴歌	治病十一証歌	雜病十一穴歌（聚英）	
×	×	卷一・長桑君天星秘訣歌	×	長桑君天星秘訣歌	長桑君天星秘訣歌（以下乾坤生意）	
天星十一穴歌訣	×	卷一・馬丹陽天星十二穴并治雜病歌	薛真人天星十一穴歌	馬丹陽天星十二穴并治雜病歌	馬丹陽天星十二穴治雜病歌	
×	×	卷一・四総穴歌	四総穴歌	四総穴歌	四総穴歌	
×	×	×	肘後歌	×	肘後歌（聚英）	
×	×	×	回陽九鍼歌	×	回陽九鍼歌	
×	×	×	×	×	鍼内障秘歌（楊氏）	
×	×	×	×	×	鍼内障要歌（楊氏）	
×	×	×	補瀉雪心歌	補瀉雪心歌	補瀉雪心歌（以下俱聚英）	
×	×	×	×	×	行鍼總要歌	
×	×	×	行鍼指要歌	×	行鍼指要歌	
×	×	×	×	×	刺法啓玄歌	
×	×	×	×	×	鍼法歌	
×	×	×	×	×	背部六俞歌	
×	×	×	×	×	腹部中六歌	
×	×	×	（提氣法歌／過関歌／提鍼歌／龍虎交戰歌／龍虎飛騰歌／陽鍼男歌／陰鍼女歌／桃山火歌／透天涼歌／蒼龍擺尾歌／赤鳳搖頭歌／子午搗臼歌）	×	三衢楊氏補瀉十二字分次第手法及歌（玄機祕要）	
×	治法第五・禁鍼穴はほぼ同。	卷一・禁鍼穴歌は、『小学』に同じ。	禁鍼穴歌	一首：『聚英』に同。 一首：同題異文。	禁鍼穴歌	
×	治法第五・禁灸穴は同題異文。	卷一・禁灸穴歌は『小学』に同じ。	禁灸穴歌	×	禁灸穴歌（以下俱医統）	
×	×	卷一・太乙人神歌	太乙人神歌	大乙人神歌	太乙歌	

九部人 神歌訣 ／九宮 尻神歌 訣	×	卷一・九神 尻神歌は 同題異文。	九神尻神歌『大全』に同じ。	×	九宮尻神（歌訣）／九部人神歌訣	卷 5
×	×	×	×	×	十二部人神禁忌歌／四季人神歌	
×	×	卷一・逐日 人神歌	逐日人神歌	逐日人神歌	逐日人神歌	
×	×	卷一・血忌 歌	血忌歌	血忌歌	逐月血忌歌	
×	×	×	×	×	逐月血支歌	
×	經絡第 三・十二 經井榮俞 經合穴	×	×	×	井榮俞原經合歌（医經小学）	
×		卷五・子午 流注逐日 按時定穴 歌	子午流注逐日按時定穴歌	子午流注逐 日按時定穴 歌	徐氏子午流注逐日按時定穴歌	
×	經絡第 三・十二 經納甲	卷五・十二 經納天干 歌	十二經納天干歌	十二經納天 干歌	十二經納天干歌（以下俱徐氏）	
×	經絡第 三・經脈 流注	卷五・十二 經納地支 歌	十二經晝夜流注歌	十二經納地 支歌	十二經納地支歌	
×	×		脚不過膝手不過肘歌	×	脚不過膝手不過肘歌	
×	×	卷五・十二 經之原歌	十二原穴歌	十二經之原 歌	十二經之原歌	
×	經絡第 三・十二 經氣血	卷一・經脈 氣血多少	×	經脈氣血多 少	十二時氣血多少歌	
×	×	×	×	×	（靈龜取法飛騰）八法歌	
×	×	×	×	×	八法交会歌	
×	經絡第 三・經脈 交会八穴	卷四・經脈 交会八穴	經脈交会八穴歌	×	八脈交会八穴歌	
×	×	卷之四・八 脈配八卦 歌	八脈配八卦歌	×	八脈配八卦歌	
×	×	卷之四・八 穴配合歌	×	×	八穴配合歌	
×	×	×	同題異文	×	刺法啓玄歌	

×	×	卷之五・五虎建元日時歌	五子元建歌（加天干于寅上）	五虎建元日時歌	八法五虎建元日時歌	
×	×	卷之四・八法逐日干支歌	×	八法逐日干支歌	八法逐日干支歌	
×	×	卷之四・八法臨時干支歌	×	八法臨時干支歌	八法臨時干支歌	
×	×	×	八法手訣歌	×	八法手訣歌（聚英）	
×	經絡第三・經穴起止	卷一・經穴起止歌	×	經穴起止歌	臟腑十二經穴起止歌	卷6
×	×	經絡第三・十二經脈	卷一・十二經脈歌	十四經穴歌	十二經脈歌	手太陰肺經穴歌（医学入門）／手陽明大腸經穴歌／足陽明胃經穴歌／足太陰脾經穴歌／手少陰心經穴歌／手太陽小腸經穴歌／足太陽膀胱經穴歌／足少陰腎經穴歌
					手厥陰心包絡經穴歌／手少陽三焦經穴歌／足少陽膽經穴歌／足厥陰肝經穴歌	卷7
×	×	×	×	×	任脈經穴歌／督脈經穴歌	
×	經絡第三・奇經八脈	卷四・奇經八脈周身交会歌	奇經八脈歌	奇經八脈周身交会歌	奇經八脈歌（医經小学）	
×	經絡第三・十五絡脈	卷一・十五絡脈歌	十五絡穴歌	十五絡脈歌	十五絡脈歌	
×	×	卷一・孫思邈先生鍼十三鬼穴歌	孫思邈先生鍼十三鬼穴歌	孫思邈先生鍼十三鬼穴歌	孫真人鍼十三鬼穴歌	卷9
×	經絡第三・十二經本一脈	卷一・十二經本一脈	×	十二經本一脈	×	
×	×	卷四・飛騰八法歌 卷五・子午流注十二經井榮俞原經合穴	×	飛騰八法歌／子午流注十二經井榮俞原經合歌	×	

表3 各鍼灸書特有の歌訣

『鍼灸玉龍經』	『鍼灸聚英』巻四	『鍼灸全書』巻下	『鍼灸大成』
穴法歌（穴法相応三十七穴）／鍼灸歌	巻四：十四經歩穴歌／天元太乙歌／八会穴（歌）／臟腑七募穴歌／八法八穴歌（西江月調）／六十六穴陰陽二經相合相生養子流注歌／宋徐秋夫鬼病十三穴歌／十干相生流注歌／周身氣血歌／生成數歌／流氣歌／納氣歌／進鍼歌／八法飛騰定十干八卦歌／三陰三陽歌／『神應經』腧穴証治歌	千金十一穴歌	巻十：手法歌／論色歌／認筋法歌／面部五位歌／命門部位歌／面色圖歌／湯氏歌／入門歌 補遺：病症死生歌／診脈歌／識病歌／陳氏經脈并色歌／論虛實二症歌／五言歌

表4 「流注指微鍼賦」における句末押韻字

段落 句末漢字	郭錫良による『広韻』 の声・韻・開合・等・ 声調・撰、推定音価	寧繼福による『中原音韻』 韻・開合・等、推 定音価	段落 句末漢字	郭錫良による『広韻』の 声・韻・開合・等・声調・ 撰、推定音価	寧繼福による『中原音韻』 韻・開合・等、 推定音価
一段 衛	云祭合三去蟹 jɿwei	齊微去声 ui	五段 医	影之開三平止 iə	齊微平陰 i
鍼	書侵開三平深 ɕiɛm	侵尋平陰 tɕiɛm	疾	從質開三入臻 dzɿɛt	齊微入平 tɕi
瘦	山宥開三去流 ʃiəu	尤侯去声 ɕəu	内	泥隊合一去蟹 nɯoi	齊微去声 nui
深	侵尋平陰 siem	澄侵開三平深 ɕiɛm	速	心屋合一入通 suk	魚模入上 su
谷	見屋合一入通 kuk	魚模入上 ku	稀	曉微開三平止 xɿəi	齊微平陰 xi
沈	澄侵開三平臻 dʒiɛm	侵尋上声 ɕiɛm／去 声 tɕiɛm	跡	精昔開三入梗 tɕiɛk	齊微入上 tɕi
			師	山脂開三平止 ʃi	支思平陰 ʃi
二段 賦	幫遇合三去遇 pɿu	魚模去声 fu	出	昌術合三入臻 tɕ 'ɿuɛt	魚模入上 tɕ 'ɿu
注	章遇合三去遇 tɕiɿu	魚模去声 tɕiɿu	悲	幫脂開三平止 pi	齊微平陰 pu
論	余遇合三去遇 jɿu	魚模去声 iu	六段 微	明微合三平止 mɿwei	齊微平陽 Uui
知	知支開三平止 tɕiɛ	齊微平陰 tɕi	訣	見屑合四入山 kwɿɛt	車遮入上 kiɿɛ
附	並遇合三去遇 bɿu	魚模去声 fu	骨	見沒合一入臻 kuɛt	魚模入上 ku
篤	端沃合一入通 touk	魚模入上 tu	熱	日薛開三入山 tɕiɛt	車遮入去 tɕiɛ
誤	疑暮合一去遇 ɳu	魚模去声 u	絶	從薛合三入山 dzɿwɛt	車遮入平 tɕiɿɛ
三段 流	来尤開三平流 liəu	尤侯平陽 liəu	別	幫薛開三入山 pɿɛt	車遮入平・入上 piɛ
求	羣尤開三平流 giəu	尤侯平陰 k 'iəu	驟	曉支合三平止 xiwe	(齊微平陰 xui)
数	山寢合三上遇 ʃɿu	魚模上声・去声 ɕu	吸	曉緝開三入深 xiɛp	齊微入上 xi
周	章尤開三平流 tɕiəu	尤侯平陰 tɕiəu	血	疑寢開三去止 ɳiə	車遮入上 xiɛ
主	章寢合三上遇 tɕiɿu	魚模上声 tɕiɿu	七段 義	疑寢開三去止 ɳiə	齊微去声 i
収	書尤開三平流 ɕiəu	尤侯平陰 ɕiəu	機	見微開三平止 kiɛi	齊微平陰 ki
者	章馬開三上仮 tɕiɛ	車遮上声 tɕiɛ	趣	清遇合三去遇 ts 'ɿu	魚模去声 ts 'ɿu
取	清寢合三上遇 ts 'ɿu	魚模上声 ts 'ɿu	悟	疑暮合一去遇 ɳu	魚模去声 u
柔	日尤開三平流 tɕiəu	尤侯平陽 tɕiəu	危	疑支合三平止 ɳiwe	齊微平陽 Oui
補	幫姥合一上遇 pu	魚模上声 pu	度	定暮合一去遇 du	魚模去声 tu／蕭豪 入平 tau／歌戈入平 to
憂	影尤開三平流 iəu	尤侯平陰 iəu			
由	余尤開三平流 jɿəu	尤侯平陰 iəu			
会	匣泰合一去蟹 vuai	齊微去声 xui	克	溪德開一入曾 k 'ək	(皆来入上 k 'iai)

邪	邪麻開三平仮	車遮平陽 siɛ	依	影微開三平止 iɛi	齊微平陰 i
廖	(微尤開三平流 tɕiəu)	尤侯平陰 tɕʰəm	八段 儀	疑支開三平止 ŋiɛ	齊微平陽 i
四段 水	書旨合三上止 cwi	齊微上声 ɕui	式	書職開三入曾 cɪək	(齊微入上 ɕi)
母	明厚開一上流 məu	魚模上声 mu	臆	影職開三入曾 ɪək	(齊微入去 i)
子	精止開三上止 tsɪə	支思上声 tsɪ	則	精德開一入曾 tsək	皆來入上 tsai
矣	云止開三上止 jiə	齊微上声 i			
復	並屋合三入通 bɪuk	魚模入平／入上 fu			
已	余止開三上止 jiə	齊微上声 i			
裏	來止開三上止 liə	齊微上声 li			
虛	曉魚開三平遇 xɪo	魚模平陰 xiu			
指	章旨開三上止 tɕi	支思上声 tsɪ			

表5 「八法八穴歌」における押韻状況

交 会 穴 名:句末漢 字	郭錫良による『広韻』の 声・韻・開合・等・声調・ 撰、推定音価	寧繼福による『中原 音韻』の韻・開合・ 等、推定音価	交 会 穴 名:句末漢 字	郭錫良による『広韻』の 声・韻・開合・等・声調・ 撰、推定音価	寧繼福による『中 原音韻』韻・開合・ 等、推定音価
公孫 停	定青開三平梗 dieŋ	庚青平陽 t'əŋ	後谿 癰	端仙開四平山 tien	先天平陰 tien
鳴	明庚開三平梗 mieŋ	庚青平陽 mieŋ	漣	來仙開三平山 liɛn	先天平陽 liɛn
病	並映開三去梗 biɛŋ	庚青去声 piɛŋ	遍	幫霰開四去山 pien	先天去声 piɛn
疼	定登開一平曾 dəŋ	庚青平陽 t'əŋ	咽	影仙開四平山 iɛn	先天平陰 iɛn
心	心侵開三平臻 siɛm	侵尋平陰 siɛm	牽	邪仙合三平山 ziɛn	先天平陰 k'ien
応	影證開三去曾 iəŋ	庚青去声 ɔiəŋ	砭	幫黠開三去咸 piɛm	(廉纖去声 fiɛn)
内関 脹	知漾開三去宕 tiɑŋ	江陽平陰 siɑŋ	申脈 疼	定東合一平通 duoŋ	庚青平陰 t'əŋ
肛	見江開二平江 kəŋ	(江陽平陰 kaŋ)	稜	來蒸開三平曾 liəŋ	庚青平陰 ləŋ
傷	書陽開三平宕 ɕiɑŋ	江陽平陰 siɑŋ	冷	來梗開二上梗 ləŋ	庚青上声 ləŋ
搶	見養開三上宕 kiɑŋ	江陽上声 ts'iaŋ	憎	精登開一平曾 tsəŋ	庚青平陰 tsəŋ
当	端唐開一平宕 tɑŋ	江陽平陰 taŋ	淋	來侵開三平深 liɛm	侵尋平陽 liɛm
堂	定唐開一平宕 dɑŋ	江陽平陽 t'ɑŋ	応	影證開三去曾 iəŋ	庚青去声 ɔiəŋ
当	端宕開一去宕 tɑŋ	江陽去声 taŋ	列缺 痰	定談開一平咸 dam	監咸平陽 t'am
臨泣 攀	來仙合三平山 liɛn	先天平陽 liɛn	難	泥寒開一平山 nan	寒山平陽 nan
連	來仙開三平山 liɛn	先天平陽 liɛn	噎	影屑開四入山 iet	車遮入声 iɛ
旋	邪仙合三去山 ziɛn	先天平陽 siɛn	寒	匣寒開一平山 van	寒山平陽 xan
牽	邪仙合三平山 ziɛn	先天平陰 k'ien	寒	匣寒開一平山 van	寒山平陽 xan
偏	滂仙開三平山 p'ien	先天平陰 p'ien	散	心旱開一上山 san	寒山去声 san
驗	疑黠開三去咸 piɛm	廉纖去声 iɛm	照海 鳴	明庚開三平梗 mieŋ	庚青平陽 mieŋ
外関 風	幫東合三平通 piuŋ	東鍾平陰 fuŋ	并	幫勁開三去梗 piɛŋ	庚青去声 piɛŋ
攻	見東合一平通 kuŋ	東鍾平陰 kuŋ	緊	見軫開三上臻 kiɛn	真文上声 kiɛn
痛	透送合一平通 t'uŋ	東鍾去声 t'uŋ	頻	並真開三平臻 p'ien	真文平陰 p'ien
紅	匣東合一平通 vuŋ	東鍾平陽 xuŋ	侵	清侵開三平深 ts'iem	侵尋平陰 ts'iem
嬌	曉東合一平通 xuŋ	東鍾平陰 xuŋ	定	定徑開四去梗 dieŋ	庚青去声 dieŋ
重	澄腫合三上通 dʒiwoŋ	東鍾去声 tɕiwoŋ			